

わしは、張り切っていた。……弟の清浜と協力して、都への航路を開拓し、この真砂の郷を経営し庄司となった。従五尉の位をもらったのも、その頃じゃ……。全ては、漣と家族のためじゃった……。」

「じゃが、幸せは、そう長うは続かなんだ……。」

山賊どもは、まだ、漣を狙っておったんじゃ……。わしは、それに気づかなんだ。……わしが都に行つて留守にとるあいだに、山賊どもが、再び、漣を襲った。

漣の奴は、わしのために……操を守つて、短剣で胸を突いて自決しおつた……。」

「わしは、都から戻つて来ると、郷の者達を集めて、山狩りをして、山賊どもを一人残らず皆殺しにした。じゃが、そんな事をして、漣の命が戻つて来るわけではない。

それからの、わしは、まるで、闇の中を生きているようじゃ。

……わしは、漣に、どんな形でも生きていて欲しかった……。」

清重は、少し、泣いているようだった……この好々爺のような清重に、こんな激しい一面があるとは、安珍には以外だった。

「わしにとつて、残された一筋の光が希代じゃ……。」

希代が大人になって、嫁に行く日を楽しみにして……それだけで、わしは生きとる……。」

……本当に幸せになった希代を見ること……それが、わしの今生の願いなんじゃ……。」

清重は、言いながら、また、清姫の髪を撫でる……。」

清姫は、よつほど、疲れたのだろうか……。清重の膝の上で、ただ、スウスウと幸せそうな寝息をたてている……。」